被爆の悲しみ継承へ

平和記念式典参列の都道府県遺族代表

六日営まれる広島市の原爆死没者慰霊式・平和祈念式（平和記念式典）には各都道府県の遺族代表が参列する。被爆から六十二年。遺族の高齢化を反映し、出席者は三十九人と二〇〇四年と並び最も少ない。四十三歳から最高齢者は八十五歳。取材に応じてくれた遺族に胸の奥底に刻まれた悲しみ、平和を次代に託す決意を聞いた。（敬称略）

長井　文雄(72)＝北海道
妹清子、50年7月23日、9歳、不明
妹は上天満町の自宅で母と寝ていて一緒に家の下敷きになった。二人がどう助けられたのかは思い出せない。被爆後、妹は十分に話せず、記憶が止まったように、こたつにずっと座っていた。母は「頭を強く打ったから」と話していた。

齋藤　淳(47)＝青森
父祐一、06年2月10日、81歳、胃がん
陸軍船舶特別幹部候補生だった父は六日に江田島から広島市に入り、一週間、遺体を運ぶ作業などをした。着衣の有無で遺体の損傷が違ったらしく、夏に裸でいると服を着るよう怒られた。遺影を持って行き、復興した広島の街を見せたい。

菊地　孝子(52)＝宮城
義父孝雄、07年1月27日、79歳、胃がん
特攻艇の乗組員として江田島にいて、原爆投下当日の午後、救護活動のため入市したと聞いている。晩年は県原爆被害者の会会長を務め、体調を崩しても活動を続けた。見かねた私の夫が、休むよう促しても耳を貸さなかった。

三浦　浩治(43)＝秋田
伯母キミ、01年2月7日、76歳、脳卒中
看護師だった伯母は市内の病院で被爆したらしい。被爆後は体調不良で悩んだが、私が物心ついたころには雑貨店を切り盛りしていた。高校の修学旅行で広島の原爆資料館を訪れ、「こんな地獄を経験したのか」と衝撃を受けた。

鈴木　一義(57)＝山形
父豊次、06年12月22日、92歳、肺炎
陸軍にいて、爆心地から三・九キロの場所で被爆したと聞いている。背中に軽いやけどを負った。原爆についてあまり語らなかったため、正確な位置はよく分からないが、供養のために父が被爆した場所を姉たちと訪ねてみたい。

《記事の読み方》遺族代表の名前と年齢＝都道府県名。亡くなった被爆者の続柄と名前、死没年月日（西暦は下2ケタ）、当時の年齢、死因、遺族のひとことーの順。欠席は岩手、福島、群馬、岡山、高知、長崎、鹿児島、沖縄の八県。

茂木　貞夫(72)＝茨城
父嘉勝、68年12月17日、81歳、交通事故死
吉島の広島刑務所で働いていた父は事務棟で被爆した。私も大けがをしたが、顔中に包帯を巻いた父と再会した時はほっとした。父のけがは何年たっても化膿（かのう）したり治ったりを繰り返した。自分で薬を塗っていた後ろ姿が忘れられない。

佐藤　幸枝(77)＝栃木
兄西田忠、45年8月13日、21歳、被爆死
軍隊にいた兄は当時の鷹匠町で被爆。私も学徒動員先の楠木町で被爆した。兄が亡くなったと聞いた時、次は私かと覚悟した。今も体調が少しでも悪くなると原爆が頭をよぎる。被爆者は一生この重荷を背負わなければいけない。

井上　純子(71)＝埼玉
母横山恒子、45年8月6日、41歳、被爆死
母は婦人会仲間と小網町で建物疎開中に被爆した。骨は見つからず、いつかひょっこり帰って来るのではと、ずっと思っていた。〇五年に母が身に着けていた指輪を原爆資料館で発見し、六十年たってやっと心の整理がついた。

岩佐　光利(59)＝千葉
父睦利、05年6月15日、83歳、肺がん
海軍にいた父は原爆が投下されたとき、市内で防空壕（ごう）を掘っていたらしいが、あまり原爆のことは話そうとしなかった。悲惨な体験だったのだろう。八月六日に黙とうしていた父の後ろ姿に胸の底にある悲しみを感じ取った。

大岩　孝平(75)＝東京
母みさほ、89年2月1日、88歳、大腸がん
あの日、病気で学校を休んだ私を、母は段原中町の自宅で看病してくれていた。やけどした被爆者が次々と逃げてきて、母と二人で家に助け入れて看病した。今でも、悲惨な光景が目に浮かぶ。身体が動くうちに、慰霊碑を訪れたい。

影山美津子(76)＝神奈川
夫秀俊、98年10月24日、72歳、虫垂がん
夫は袋町の富国生命ビルにあった逓信省関連施設で働いていて建物の下敷きになった。何とか芸備線で吉田町の姉の元へ逃げたが、高熱や嘔吐（おうと）、脱毛で苦しんだ。核兵器の使用だけではなく、世界中の武器根絶を願う。

山内　悦子(78)＝新潟
父林鷹三、45年8月19日、41歳、被爆死
県産業奨励館内の内務省中国四国土木出張所に勤めていた父は紙屋町で建物疎開中に被爆した。牛田の官舎に歩いて帰り家族に「無事だったか」と声を掛けてくれた背中は額縁のようにやけどしていた。広島での父との思い出の地を訪ねたい。

斉藤由紀子(52)＝富山
父岡田一栄、00年2月27日、72歳、肺がん
志願兵の父は富山県を離れて広島に行き、朝礼中に被爆した。「ピカドン」ではなく「ピカ」しか記憶になかったらしい。原爆についても多くを語らなかった。今回は長男(30)を連れて行く。核兵器の悲惨さ、平和の大切さを伝えたいから。

西本　武司(63)＝石川
母サツ子、60年6月10日、47歳、胃がん
私をおぶって親せき宅に向かう途中、爆心地から約四キロ地点で被爆。山の陰だったので大けがはしなかったが、晩年は体中に斑点ができていた。いまだに核兵器があるのは悔しい。人が作ったものは人の手でなくせる。式典で、そう祈りたい。

大村　和子(60)＝福井
父幸保、06年12月3日、90歳、多臓器不全
東洋工業の小倉出張所（北九州市）で所長をしていた父は六日に広島入りし、牛田の実家で被爆。向洋の本社へ行く途中に見た遺体やけが人の様子をつらそうに話していた。式典に参加できない母の思いも重ね、父たち犠牲者を追悼したい。

遠山　睦子(65)＝山梨
兄故選浩行、45年8月7日、12歳、被爆死
広島二中一年だった兄は東洋工業に勤務していた父は夜勤明けで、宇品の畑で夏野菜の収穫中に被爆した。牛田の自宅へ向かう途中、水をほしがる人たちにキュウリをあげたという。父のため、広島で祈りをささげたいと思い参列を決意した。

永田　正則(61)＝愛知
父敏男、06年6月15日、84歳、心不全
軍人だった父は原爆投下後に入市、死体が目立つ中で救援活動をした。家族にはあまり被爆体験を話さなかったが、高校生に話したり、新聞社へ体験記を送ったりしていた。後世に残したいという思いは相当強かったはずだ。

谷　恵美子(82)＝三重
夫次男、06年8月28日、81歳、肺炎
日ごろから被爆体験を「伝えていかなあかん」と話していた父。呉の海軍に所属し、原爆投下翌日に入市、広島駅の近くで遺体を運ぶ作業をした。話し下手の父だが、子や孫にはしっかりと被爆体験を伝え、メモも残している。

嶋林　聡(49)＝滋賀
父英雄、04年2月10日、81歳、脳内出血
広島高等師範の学生だった父は、爆心地から約五キロの向洋の軍需工場にいたが、やけどなどはしなかった。終生、平和への願いを短歌や詩に詠みこんでいた。小学校教員の私も教え子にヒロシマを伝えたいと思い、参列を決意した。

弓田　博規(73)＝京都
妻百合子、07年2月23日、68歳、脳梗塞（こうそく）
竹原にいた妻は、父を捜すため家族と入市被爆した。大野浦の陸軍病院で見つけた父は焼けただれていて判別できないほどだったと言う。その父も昨年九月に亡くなった。二人の供養のため式典への参列を決めた。

新良　光子(79)＝大阪
弟佐伯英二、45年8月7日、15歳、被爆死
南観音町に住んでいた。原爆で、八月だけで親族十人を奪われた。弟は小網町で建物疎開中に被爆。「残念」と何度もつぶやく声を両親は忘れられないと言う。自らの手でわが子の遺体を焼く無念さを思うと言葉にできない。

田中　勉(70)＝兵庫
父勝美、45年8月6日、37歳、被爆死
前夜、父は堀川町の自宅に残り、家族は五日市町に疎開した。母と原爆投下翌日に捜したが見つからず、被爆後に父が目撃された八丁堀の土を一握り持ち帰り、墓に入れた。「しょうがない」で済まされない事実がたくさんあった。

和田　修身(69)＝和歌山
父憲一、03年8月11日、94歳、心不全
海軍にいた父は、あの日、山口県東部の山中で作業していたと母から聞いた。父自身は、その後の足取り、原爆について話さなかった。もっと当時のことを聞いておけば、と残念に思う。初めての広島。式典の後、父のいた広島を歩きたい。

谷　アヤ子(82)＝福岡
夫喜久夫、04年4月15日、85歳、腎臓がん
北九州市で軍医をしていた夫は七日に入市被爆した。山手町の救護所に詰め、治療は油を塗るぐらいしかできなかったという。三年後に眼底出血を起こし、医者を続けられなくなり無念だったと思う。初めて訪れる広島を目に焼き付けたい。

原　澄恵(85)＝佐賀
弟岡本昭三、45年8月7日、12歳、被爆死
末っ子の弟は当時、崇徳中一年だった。八丁堀で建物疎開中に被爆し、全身やけどを負った。原爆でなくした弁当箱が心残りだったようで、「新しいのを買って」とうめき続け、翌朝逝ってしまった。いつまでも忘れられない。

原口　明子(79)＝熊本
夫洋、06年6月25日、82歳、肝硬変
徴兵され、知覧（鹿児島県）で警戒や訓練をしていた夫は、原爆投下翌日の夜に入市。今の原爆ドーム付近で犠牲者の遺体を焼いた。火葬が追いつかないほどの数、変わり果てた姿だったといい、「戦争はこりごり」とこぼしていた。夫の思いを継いで平和を祈りたい。

吉本　桂三(72)＝大分
父静雄、62年9月28日、55歳、がん
建設会社の社長として皆実町で建物の取り壊し作業中に被爆。胸部を骨折したが、一週間ほど従業員の手当や食料集めをした。部下の安否を第一に考える男らしい人だった。目を焼かれ、徐々に視力を失っていった。

小島　誠(60)＝宮崎
父三郎、06年7月15日、90歳、心不全
県西部の陸軍船舶司令部に所属していた父は七日、同僚らの家族を捜すため広島市に入り被爆した。終戦後は県議を務める傍ら、被爆者の集いを開くなど地元の平和活動にも携わった。父がよく歌った「原爆を許すまじ」が耳から離れない。

ライトアップされた祈りの泉の噴水越しに浮かび上がる原爆ドーム。遺族はさまざまな思いで「あの日」を迎える（広島市中区）

核の脅威を実感／全犠牲者に冥福

伊藤　孝文(68)＝広島
父隆義、45年8月6日、43歳、被爆死
あのとき、父は陸軍に召集されて大手町で行進中だったという。暑くなると、昨日のことのように当時を思い出す。式典とは疎遠だったが、62年前の話では済まないほど今、核兵器を脅威に感じる。参列を通して平和への思いを示したい。

硯谷　文昭(76)＝山口
父吉雄、67年2月1日、67歳、脳梗塞（こうそく）
父は南観音町の自宅を出る直前に被爆した。体調を崩し、つらかったろうが弱音は一切吐かず仕事に打ち込んだ。私も半年間やけどで寝たきりになった。今も体調不安はあるが、広島の地で死没者のため黙とうしたい。

藤田　肇(79)＝島根
妹恭子、45年8月12日、8歳、被爆死
白島国民学校の校舎の下敷きになった妹を見つけた時はもう意識がなかった。家族でみとったことを思い出すと胸が苦しい。妹が「お兄ちゃん」と呼ぶ声を今も覚えている。生涯の苦しみを生む原爆は造っても使ってもいけん。

田端　静子(84)＝鳥取
父庄本鶴一、71年4月19日、79歳、心臓まひ
舟入本町の病院に入院中の父と私は建物の下敷きになった。「おまえは逃げろ」と繰り返す父を助け出し、火の海から逃げたのを鮮明に覚えている。6年前、孫やおいに言われ、体験を本につづった。体験を知り、繰り返さないことを願う。

平野　順子(64)＝徳島
夫仁志、04年6月27日、59歳、肺がん
夫は生後7カ月のとき宇品の自宅で被爆した。終戦後、親類がいた徳島に戻り、原爆は「ピンとこない」と話していた。家族以外には広島の話さえしなかった。幼いころに嫌がらせを受けたようで、つらい思い出だったのだろう。

早川　義行(81)＝香川
妻ユキエ、05年4月20日、81歳、呼吸不全
大須賀町の鉄道病院で看護師として勤務中に被爆。割れた窓ガラスで体中に傷を負いながら、けが人を看護した。戦後も体に残るガラス片に苦しみながら仕事を続け、子ども3人を育てた強い人だった。すべての犠牲者に冥福を祈りたい。

富林　健二(61)＝愛媛
父守、45年8月6日、25歳、被爆死
父は横川駅のホームで被爆した。電車を確認しようと日陰から身を乗り出した瞬間だったという。母も白島町で被爆しており、自分はまだ胎内にいた。横川駅のホームに立ち、見たことのない父の姿に思いをはせたい。

世界中の武器根絶願う／「しょうがない」で済まぬ／広島 目に焼き付けたい